



2019 年林間聖会 資料

故・江藤 博久 牧師 説教

「集中治療室」

(2014 年 11 月 23 日 高津教会にて)

聖書箇所 エゼキエル書 18:30～32

- 30 それゆえ、イスラエルの家よ、わたしはあなたがたをそれぞれその態度にしたがってさばく。
——神である主の御告げ——悔い改めて、あなたがたのすべてのそむきの罪を振り捨てよ。
不義に引き込まれることがないようにせよ。
- 31 あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。
- 32 わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ——だから、悔い改めて、生きよ。

おはようございます。この栄光ある高津教会の講壇にお招きいただいたこと、本当に心から感謝いたしております。この講壇との私の、ちょうど 8 年前に遡ります。ちょうど神学生の 4 年生でインターン実習の前期の 6 ヶ月間で、実は大変皆様と、満先生の指導、並びに本当に皆さんの温かいお交わりの中に、この教会というものをどのようにしていくのか、よく学ぶことができましたことをほんとうに感謝しております。

それでこの度、いろいろ何をお話しようかなと思ひ、調べ物をしていきますと、ちょうどその時に、高津でのインターン実習の報告書というものが出来てまいりまして、そこで、ごく短い文章ですからご披露してそれから本題に入っていきたいと思ひます。

2006 年のことでございました。インターンの期間は 4 月の中旬から 9 月いっぱいまでの半年間で、実はお邪魔いたしました。インターンというのは、ちょうど 120 のインマヌエルの教会が、当時教団全体でございました。その中でどこへ遣わされるのか、これは全然皆目見当がつかないわけです。そういうような中で、「高津に、江藤神学生は半年間お願いします」と言われたわけです。これはもう恐ろしくて、驚愕いたしました(笑)。しかし来るべきものが来た、という緊張はものすごく走りました。一度はこ



の教会の現場ですね、イエス・キリストの歩かれた、建て上げられた現場で、藤本満先生の足下で、足元で学びたいとそうのように思っていたからです。

半年間、マンツーマンで神学生はひとりですから、願ってもない機会でございました。私のような 60 歳を過ぎてから神学生になったわけですから、そのような者が、それでも何と言ったらいいでしょうか、日本の代表的な神学者であり、またメッセンジャーから、本当に説教の組み立て方、霊性、先生の持っていらっしゃるあの霊性ですね、そして牧会の持ち方、教会活動その他の。その中には壮年会、婦人会、青少年への対応、そして聖餐式とか洗礼式・結婚式・葬儀などの典礼のやり方、そしてその中心的な聖日礼拝ですね、そして祈祷会の持ち方など、全体的なこの教会運営の中の中心なこと、それを直接先生から学べる。ほんとうに感謝なことではございました。それも 6 ヶ月間も。

とても嬉しかったことですが、しかしそのような学びよりも、何よりも先生を通して私が嬉しかったこと、それは伝道者としての一つの大きな姿というのでしょうか、模範的な姿でございました。それは何かと申しますと、イエス・キリストに対する完全な信頼と、そして最も大事な神の愛というもの、その揺るぎないものを先生は心に軸としてお持ちになっており、すべての行動を学び、その姿が自然な流れの中でその牧会を

進めていく姿を、私はその時6ヶ月間の中で私は本当に学びました。しかしそれはごく一部しか学び取れないものです。しかしそのイエスの香りをそのように伝道者から学び取っていくことのとて大切な部分を、神学生として味わったわけですね。本当に感謝しております。

そして、インマヌエルのまだ藤本栄造先生がもう少し若いですね。8~9年前ですから。お元気なお姿、そして今も元気ですけれども。そしてその信仰を私が云々するのは非常に失礼になりますが、非常に円熟した——聖書の中ではよく「謙遜と柔和」という言葉があり、牧師たちの将来の姿というものを目標としていますが——その謙遜であり、柔和な円熟した信仰というものを本当に味わうことが、見せていただくことができ、その後満先生と二人で何十年とこの高津教会を建てられて来て、養われてきた皆さんお一人お一人、信徒も大変大きな恵みがあるわけですね。この高津教会で信仰生活を送ることの恵みの大きさというものが、別の意味では、イエス・キリストが「平和の君」であり、愛そのものであるというようなその真理と同じように、もう一つは皆さまがそのような先生方の牧会の中で養われていくということが、もう一つ大きな大切なことでありますね。

そういうようなことがわずか半年間でしたが、とても大きく、これはその時感じたレポートをそのままお話ししているわけですが、その信徒たちの深く教会を愛し——この中に沢山私、懐かしい人がいっぱいおります。直ぐに肩に手を挙げてこうしたい方々が沢山いるんです——その方々を通して、半年間それからその後の聖会とかいろんな諸集会でインマヌエルでお会いして挨拶したり、いつも笑顔でほんとにそのような信徒たちの、深く教会を愛して先生ご夫妻を心から愛して信頼している姿、そして先生方を、とても御夫妻を愛していらっしゃいます。すべてが非常に祈り深い、愛に満ちた、練られた人々でありました。信仰、祈りに練られた人々、皆さんは

余りにも恵みが深い、多いので気がつかないかもしれませんが、私は見た瞬間から半年間、皆さま方お一人お一人が、イエス・キリストの教会で養われたその代表的な方々、そういう環境にあると

私は思いました。

私自身に対する満先生の直接的な指導の中で、これは普通の教会では見られない勇断でございますが、私のような者に、祈祷会でのすべてのメッセージ、それから聖日礼拝での月1回のメッセージ、そして私が先生にお願いして、聖日礼拝の前の30分位を——大切なこれは「静まりの時」なんですね。礼拝を受ける30分前というのは、信徒の方が30分前ぐらいから来ておられる方も多くて、それで皆さんとこれは実は約16週間かかって、「静まり、黙想のクラス」と申しましょうか、これは薫田二雄先生（インマヌエルの教団創設者）が非常に大切にしておられた密室祈祷とか黙想、そして御言葉を学んで行く。そのようにしてクリスチャンの有益な働き、そのクラスを16週に亘って持ったわけでありましたが、その大きな機会を先生がくださったことを本当に深く感謝いたします。そして先生が多忙を極める中で、ご存知のように沢山の書物を刊行なさる中、私のメッセージに対するアドバイスをほんとによくいただきました。今も大切にそれを保管いたしております。

今日私の方から先生に、突然のことでありましたがご連絡いただいて、「では先生、私一度でいいから大教会の信者さんの前で(笑)兄弟姉妹の前で——おそらくここにいるのはクリスチャンばかりだと思うんですね、8割方が。2割が求道者だと思うんですが——私の献身の証しを一回やらせてもらえないでしょうか」というと、「あ、そうですか、喜んで。どうぞ」ということで、このエゼキエル書の18章30節~32節、戸塚兄からお読みいただきましたが、もう一度私の方で改めて短いところですからお読みしたいと思います。

(※冒頭の聖書箇所を参照)

これが私の献身のみことばでありました。恐らく皆さんの中には、すべてが神学校に入っているのが献身ではありません。それは心の中に神さまの召しがあって、恐らく台所に立って、家庭を守りながら、心は献身をなさって教会に仕えておられる方が沢山いらっしゃると思います。そして、神さまから召しを受けても、なかなか踏ん切りがつかないと、いろんな会社の仕事があり……。それで定年になってからもう一回神学校で勉強して、たとえ5年でも10年でも講壇に立ちたいと願っている方もいらっしゃるかもしれま



せん。とても素晴らしい栄光のお仕事であります。それが50年続こうが10年であろうが、どちらが勝ち負けとかそういうことではありません。神さまが召された中で、そのような意味で、定年からでもどんどん献身なさって、それが5年であろうと10年であろうと、とにかく神さまの世界に仕えて喜ばれて生きるということでもあります。



私の献身の証しであります。私がイエスさまの救いにあずかったのは、救いがありますが、49

歳の時であります。シンガポールで仕事をしているときでありました。その後2年後の1991年に、51歳で東京に転勤となり、野村証券グループの役員としてスタートしました。生涯私は営業マンで多忙でありました。新入社員の時から営業、そして定年になるまですべて営業、営業関係の仕事。だから生涯とても忙しかった。でも、49歳でクリスチャンになって東京へ転勤して、生活スタイルというのが全然変わりました。朝は5時に起きて、聖書を読み、祈って出社しました。皆さん、同じ信徒の、当時は信徒でありましたから、人一倍働いて、夜の10時にはベッドに入る日々でありました。

そして日本に、初めて日本の教会に導かれたのがインマヌエルの神学院教会でした。隣の教会ですね。別に聖人君子を気取っているわけではありません。そんなつもりは一切ありません。主は恵みを沢山与えて下さり、ごく普通に信徒生活を、聖日礼拝、水曜日の夜の祈禱会、それから土曜日は神学院のあの広い会堂と、男子トイレの清掃奉仕、これを皆さんと5~6人の方々と一緒に、女性が多かったです。奉仕を楽しくさせていただきました。従って会社での50を過ぎて役員になってからの土日のゴルフ、そしてまたウイークデーの夜の酒。それから麻雀は私はとても好きで、学生時代、早稲田時代からやっていた思い出がありますが、捨てたと言って良いほど、時間がないわけですから遠慮させていただきました。それだけに私自身の昼間の仕事については、社内でのチームワーク、付き合いもありというわけですから、チームワーク、それから仕事の質、自分自身率

て働きました。それがクリスチャンとしての主に対する思いがありますから、率先して働き、部下の評価にも公平を心がけました。

とにかく神さまは不思議なほど、すべてを祝福してくださいました。私は俗に言うクリスチャン・ビジネスマンの難しさはわかっているつもりです。これは皆さんは心配して、まずいんじゃないかと仰る方もいるんじゃないかと思えます。世間は私たちに多くの矛盾を強いてきます。いつでもなんでもすべてがうまくいくわけではありません。誰もが理解してくれる訳でもありません。でも神様を第一にして間違いないということ、私自身ほんとに心からお話できます。これこそがすべての祝福の道であると、本当に心から言えます。

60歳で当時定年は今でも60歳ですが、定年退職後しばらくして、人生の大きな転機が私自身に訪れました。それは私が持病である糖尿病のカテーテル検査をいたしますと、心臓冠動脈がここにありますが、多くの人がこの病気にかかりますが、90%位が不能になっていたわけです。高速道路の故障した時留まる脇道がありますね。あそこだけが血が通っているような状態だったわけです。それを知らずに、翌年には定年を記念して、女房と二人で富士登山に挑戦して無事頂上まで、いろいろ苦労しましたけれども、そして頂上でまだまだ若いとほんとに喜んでいました。全くそれは知らないとはいえ自殺行為に等しいことだった(笑)んです。そんなこと知る由もありませんでした。そして慶応大学病院で人工心肺を使った4カ所に及ぶ大手術で11時間もかかりました。随分時間がかかりまして、今はもっと早く5~6時間で全部終わると思えますが。その時私は生涯のみことばであります、詩篇の23篇。あのすばらしいダビデの23篇、その中の4節を、「たとい死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。」——これはよくみなさんもお使いになることだと思いますが——本当に心に刻み込んで、全身麻酔による眠りに平安な心で滑り込んでいきました。入院したのも生まれて初めて。手術も初めて。それでも御言葉を心に刻み込んで、不安がない、不思議ですねえ、ほんとに。そして血の巡りが良くなったんでしょうか。意識がすがすがしい気分の中、ずっと戻ったのは翌日の昼過ぎで、28時間後でありました。その時眠りから覚めなかつたら死んでいたんだなあ。す

んなりと、別に気負いもなく、すんなりとそう思いました。しかし、そんなすんなり行くなら、死もまた是であると、静かに思い巡らしました。しかしイエスさまが生きていることを望まれたと、僕は目を覚ましてそのように自然に納得しました。

むしろそれからが苦しかったです。これが集中治療室の凄さと言うんでしょうか、大きな手術の経験がある方は皆そうでしょう。私にとって、皆さんにとっても同じであると確信していますが、集中治療室は医療だけの集中治療ではありませんでした。人生とたましいの集中治療です。良いことも悪いこともすべて凝縮して、集中して味わうことができました。身動き一つできないんですから。どんな環境の大きさも味わうってことしかできないのです。食欲が一切ありません。僕はものすごく食べ物が好きなんです。食欲が一切出てこないんです。だから、いろんな信徒の方々、求道者の方々でも、いろんな病を得て、いろんな精神的にも肉体的な病でも、食欲がない、それから気力ががない、いろんな病気で気力ががないという人がいらっしやいますが、その気持ちが実はここで味わうことができました。集中治療室ですから、隣のベッドの患者さんが死に直面して錯乱状態の叫びを上げている姿も、自分もまた身動きひとつできない中で、一晩中、錯乱状態で大声で叫び続けている姿を眺めている。自分もまた死と隣り合わせに寝ていることがよくわかりました。しかし、それが人生なんです。人生というのはほんとに死と隣り合わせなのです。そういうことがよく起ります。



しかしその中で、私は教会の兄弟姉妹の励ましの温かさを痛感いたしました。牧師、そして兄弟姉妹たちが、機会あるごとにお見舞いに来て慰めてくださいました。優しい妻の介護がありました。私はこの集中治療室で、クリスチャンとなって以来、十数年来の夢を叶えていただきました。49歳で信仰を持って、61歳位で実はこの手術を受けたわけですが、十年後位に。その間、私の唯一の夢は、一度でもよいからイエスさまの夢を見たいという願いがありました。ずっとイエスさまの夢を見たいなあと一度ぐらい見られないかと思っていました。ゴルフなどで空振りしてね

(笑)、……そんなつまらない夢ばかり見ていたのですが、一度だけでもいいからイエスさまの夢を見たい、それをこの集中治療室で、実は大きく、ちょうどイエスさまの天空に大きく立ち、風で真っ白なパレスチナの衣を着られたイエスさまの、裾を裾引かせ黄金色の光を発するイエスさまの正面の姿を今、夢の幻の中で見たわけなんです。そして主は、黄金色に輝く一本の光の道を幻の中に示されました。人は一人も通っていませんでしたけれども、その豊かさに満ちたほんとのすばらしい道を示してくださいました。そしてそこを突っ切るとすれば、生涯歩むようにと使徒に幻で現れたところだと私は思って、この光の道を24時間、一時でなくて24時間、朝から晩まで、そして毎日歩みたいと、これから生涯、願いを与えられたのであります。

この身体と人生とたましいの集中治療室で私が神さまからいただいたメッセージが、このエゼキエルのメッセージなんです。「生きよ」(18:32)でありました。これはねえ、私、今75歳なんです。ちょうど後期高齢者です。全て恵みだと思っていますが、これからの一日一日はすべて神さまの恵み。今まではいろいろね、いろいろな戦いとかね、牧師になってもいろいろ戦いがあります。もちろんこれからもあるでしょう。しかしこれからは後期高齢者の中での今後は、一日一日が神に、ほんとに神に120%ほんとに感謝の恵みの日とそのように思っておりますが、しかしソフトランディングと言うんでしょうか、いや今年はまだ落ち着いて、仕事というんじゃなくて、神への奉仕も一歩退いてこれから少しゆっくりしよう、なんて思う気持ちがあるんです(笑)。ですから非常に今危険な状態に、私はあるんです(大笑)。ですから死のうとする、このエゼキエル書をここでメッセージすることは、神さまは何か言っておられるのかなとほんとに強く今感じております(笑)。

32節の「悔い改めて、生きよ」というメッセージ——人生を立て直して、みこころにふさわしくないものを捨てて、まっ直ぐに生きよと。エゼキエル書における実は最大のメッセージなんです。イスラエルは戦争に負けて遠い故郷を離れ、故郷は壊滅状態であります。一生この捕囚の地でうずくまって生きていかなければならない。みんなここで死んで行くだ、これが宿命だと人々は諦めていました。ケバルという川のほとりに彼らの捕囚地がありました。川を眺め、故郷



を思い、死と隣り合わせに生きているような絶望感、虚脱感、無力感、怖いですねえ、この無力感というのは。私も同じようなものを実は味わったわけです。

信仰を持つ前、タバコを一日 100 本も吸っていたのです。それを十何年間。学生時代からず〜っと吸って、もうほとんど何十年と 100 本近く吸っていたわけですが、心臓に相当な負担がかかっていたわけです。当然の結果なのかとこう思いました。今は 1 本も吸いませんよ(笑)。もう救われて、これはねえ、きよめのひとつかもわかりませんね。初事的きよめ。酒タバコ、一連のよく言う、インマヌエルの先生がよく言うでしょう。そういうものは、あれだけ苦労したのに、ずっと、何もしないのに、ずっとなくなっちゃった。不思議ですねえ。

しかしいずれにしても、実は助け出されるまでには一日 100 本吸っていたのですから。だから 31 節には「新しい心と新しい霊を得よ」とあります。「死のうとするな」とあります。回復して病院を退院した私は、真剣に牧師となる道を模索し始めました。年齢も年齢でした。大手術のあとです。牧師となることには大きな葛藤があります。その葛藤を乗り越えることができたのは、イエスさまが妻に私の召命を喜んで受け入れる喜びの霊を与えてくださったことが大きいと思います。

最初は妻に抵抗がありました。もう私が一番苦労したところはここなんです。妻に抵抗された。妻は私の年齢と召命の確かさを確認したいという思いと、大手術の後ですから身体はもたないだろうと思ったんでしょね。それで何度も何度も。そして、僕が執拗に彼女に説得に粘ったのは、要するに牧会というのは、牧師ひとりの思いでは勝手にできない程、教会というのは夫婦が揃って、ほんとに主に献身する姿の中で初めて分担してできることですので、もうどうしても女房が参加してくれないと大変だということで、ほんとに粘りに粘った結果、ま、そうでもないと思いますが、神さまの働きで彼女に召命を喜んで受け入れる霊——喜びの霊というのは、藤本満先生のアドバイスの言葉ですね——喜びの霊を彼女に与えた——まさにそういうようなことだと思います。

そして 62 歳で神学校に入学して、4 年間に

亘る若い方々との集団生活、だから独身寮に泊まって集団生活を始めたわけです。集中的な学びが始まります。その時藤本先生にも授業を受けたことがございます(大笑)。本当にありがとうございました。素晴らしい授業でございました。

そして、神学校に入学する前、イエスさまは「光の道がある。愛と憐れみの道である」と、神の道は愛と憐れみの道であることを、私のたましいに刻み込むために、様々の理解を与えてくださいました。私自身、貧しさといっても、ほんとに人が苦しむ貧しさというものは、小学校の頃から、身体をもって味わったことがないからです。頭ではわかります。しかし身体ではわかりません。しかし、聖書の中で、イエスさまはほんとに貧しさということがいっぱいありますが、イエスさまはやっぱりそれを全て味わわれた。従って、神学生にとっても大事なことは、貧しさというとても大事なポイントを味わうということ。やはり貧しさを味わうという、これを確認することが大事かと思います。もちろん愛は大事ですが、従って、イエスさまを見つめる機会を、入学前にイエスさまは与えてくれました。

妻と二人で、タイの北方民族カレン族部落——これはクリスチアンの多い民族ですね——これは皆さんよくお聞きになっているジャドソンの宣教がず〜っとインドの方から入って行った、その実ですね。カレン族。それからハンセン氏病、エイズ施設、麻薬施設、そして私一人で今度はマニラのスラム街をそれぞれ一週間ずつ訪れました。特にマニラについては、その貧しさは想像を絶するものでした。これが、ま、僕は一言だけ言いますが、いろんな所へ神学生というより、若い方々の教会からいろいろ海外に派遣したりする、そういうような機会がありましたら、むしろ求道する可能性がある若い方々の場合は、こういう風な所へ——コストもほとんどかかりません。マニラというのは、フィリピン航空で行って戻ってくればすごく安いからです。そして宿泊費も非常に安い——こういう風な所に行かれて、ほんとに今から言いますが、とても献身のサポートになります。特にマニラについてはその貧しさについては想像を絶するものであります。しかし、スラム街にある掘っ建て小屋の教会、狭い土間に下布を敷いて語り合った婦人会、傾いた四畳半の二間、二階一間に住む五人家族との家庭集会、麻薬売春と隣り合わ

せにある青少年の賛美集会、まさに生と死がぶつかり合っていました。マニラのスラム街は5つも6つもありますけれどもね、大きな、非常に皆さん親しいのはスモーキーマウンテン、という大きなゴミの山で、この前火事があって閉鎖になりましたけれども、あそこは非常に日本でも有名ですけれども、世界でも、私はいろんな仕事で世界中回りましたけれども、マニラとN.Yのスラム街、この二つが際たるものですね。日本の山谷はそうですね、10分の1ぐらいの規模ですね。そして、典型的に違うのは、山谷は男の人が多い。男の人が一人で流れてあそこに住まわれて。しかしマニラなんかは家族で地方から、貧しさから出てきた家族。だから根本的に違うんですね。神を求める場合でもね。どちらがやさしいかと言えば、マニラの方がやさしいですね。家族愛とか。東京の場合、男の一人が救われるというのは、年取ってね、流れ流れて。非常に難しいですね。とにかく日本の十倍ぐらいのスラム街が6つぐらいありますね。麻薬、売春と隣り合わせの青年たちの賛美集会。でもその賛美が素晴らしい。まさに生と死がぶつかり合っていました。それを何十年も生涯の奉仕として宣教しているヨーロッパの宣教師がいる。日本人の宣教師は一人もいませんでした。ヨーロッパの宣教師ですよ。そこに仕えて何十年、自分の生涯ですから、ほんとにすごいなあと思いましたね。

大きな励まし、希望、愛を受けました。イエスさまは生きて働いておられました。みことばは確かな力をもって、人々を生かしていました。それが「生きよ。新しい心と新しい霊を得よ」主のすぐに輝いていた光の道でした。私は思うのです。神さまは誰にでもそのような集中治療室を与えてくださるのではないかと、思っております。

終わりますが、病院だけではないでしょう。旅行の時もあります。皆さんがお一人で旅行しているとき、国の内外を問わず、若い人が一人で自転車に乗って旅行しているとき、それが時に、神さまにこの集中治療室で受けるような出会いがあるかもしれません。また、聖会かもしれません。聖化大会とか素晴らしい会合がありますが。仕事が難しく、心も身体もボロボロの時かもしれません。やっぱり仕事というのは、本当にストレスが大きいですし、またそれを乗り切っていくのは、無理解者の中で乗り切っていくわけですから、不条理の中で大変なストレスを感

じるものでありますけれども、ボロボロになる。ボロボロになるって大変なことですね。奈落の底に落ち込んでいくような感じですから。そういう風な時に集中治療室の神さまに出会うことがあります。

神さまのメッセージはいつも同じではないでしょうか？それはいのちのメッセージです——「悔い改めて、生きよ」しかし私はひとつここで思うんです。「悔い改めて、生きよ」というこのみことば——「悔い改める」というのには、ものすごいエネルギーが要ります。自分の罪、自分の弱さを悔い改めるんですから、これを悔い改めていきる。しかし、悔い改めないと罪がわかりません。——わかります？救われるというのは神さまが救うのです。しかし心を開かないと神さまはそれを行なうことができない。

従ってここは非常に重要なポイントだと思うんですが……皆さんが例えばもし初めての求道者が教会に来て、非常に病で心は苦しんでいる人で、無気力で泣ける力もない、そういう風な方々に、悔い改めよと言っても、悔い改める力もございません。ほんとにひどい場合は。だからまずその人を、これは藤本栄造大先生は僕の言うことをダメだと言われるかもわかりませんが、まずそのままでもいいから元気に教会に通いなさいという意味で、そのままよく聞いてあげて、元気になってきたら罪の悔い改めに導いて、皆さんがいらっやっやっ、そうしないと力がありませんから、ほんとにその点をご注意していただかないと潰れますからね。

ま、このエゼキエル書は、「悔い改めて、生きよ」(18:32)というメッセージになっております。「諦めるな。死のうとするな。無気力になるな。新しい心と新しい霊をもって生きよ」と、エゼキエル書はそうように言っております。私もほんとに感謝なみことばです。それでは以上でメッセージは終わります。

<お祈り>

恵み深い天のお父さま、メッセージは尽きませんが、ありがとうございます。久しぶりに兄弟姉妹、そして大先生の元気なお姿にお会いでき、本当にありがとうございます。お一人お一人の御霊肉をイエスさまによって守られ、教会活動がますます盛んに豊かになりますように。また、献身者が多く起こされますように、主の御名を通してお祈りいたします。アーメン。

2017年10月8日(日)聖日礼拝